

## 現代語の終助詞「さ」の機能に関する考察

長崎靖子\*

### A Study of the Function of the Final Particle *sa* in the Contemporary Japanese

Yasuko NAGASAKI

#### 要 旨

本稿では、長崎（1998）の追調査として、昭和初期から現代に至る終助詞「さ」の機能的変遷を観察した。長崎（1998）では、江戸語における終助詞「さ」の機能を調査し、その主たる機能は断定の働きであったこと、またこの働きが、明治から大正にかけて、現在のように、情意表現を主体とした終助詞の機能に移行していく経過を報告した。

本調査では、終助詞「さ」を、昭和前期（第二次大戦前）、昭和後期（第二次大戦後）、平成期に分けて、その機能的変遷を観察した。昭和前期には、終助詞「さ」の用法として、江戸語に見られた丁寧な会話にも使用される用例が見られた。特に江戸語の名残のある女性の言葉遣いの中に、その用法が見られた。戦後は、終助詞「さ」の女性の用例は減少し、用言に接続する用例が増加し、「さ」は主に男性が使用する終助詞として定着した。

平成に入ると、「さ」は終助詞としての使用より、間投助詞としての使用が目立つようになる。特に若い世代では終助詞「さ」は、男性にもあまり使用されなくなっている。この結果から、今後「さ」の終助詞としての機能は、衰退していくことが予想される。

キーワード：終助詞「さ」、助動詞、終助詞、間投助詞

---

\*教授 日本語学

## 1. はじめに

筆者は長崎（1998）で、江戸から大正に至るまでの終助詞「さ」に関する調査を行なった。そして江戸語における終助詞「さ」は、「話者の判断を示す」という助動詞的な役割が主たる機能であること、この助動詞的な機能が、明治、大正にかけて、情意表現を主体とした終助詞本来の機能に移行していく経過を報告した。

本稿では、長崎（1998）の追調査として、昭和初期から現代に至る終助詞「さ」を観察する。昭和から平成に至る80余年に、終助詞「さ」にいかなる変化が見られるのか、その変遷過程を追うことが本稿の目的である。

調査資料は、東京出身の作家の昭和以降の作品（詳細は後掲の調査資料の項目に記述する。）を選んだ。但し、東京出身者の中でも、年齢や性差、出自、地域により言語に異なりがあると考えられるため、著者に関しては、その出身地域、家業、著作年の年齢等を別表に示し、終助詞「さ」の使用との関連を考察した。

尚、本稿で採取した用例は、調査資料のままの字体を使用した。作品名に関しては新字体を用いている。

## 2. 江戸、明治、大正期の終助詞「さ」

まず、これまでの終助詞「さ」に関する調査から得られた結果を記述する<sup>(1)</sup>。江戸語の終助詞「さ」の特徴としては、次のことがいえる。

- ① 用例のほとんどは体言・体言相当に接続し、断定辞として働く。
- ② 敬体、常体の両方の会話に使用される。
- ③ 女性の使用が多い。

江戸語の終助詞「さ」は、断定辞として敬体、常体のどちらの会話の中でも使用されている。江戸語における丁寧な断定表現としては「でございます」が一般的であり<sup>(2)</sup>、当時の終助詞「さ」は、この「でございます」と常体で使用される断定辞「だ」との間を担うニュートラルな語であったと考えられる。その結果③に示したように、当時は、男性より丁寧な言葉遣いが求められた女性に、終助詞「さ」が多く使用されたわけである。表1は、終助詞「さ」の使用者を年代別の資料で調査したものであるが<sup>(3)</sup>、この結果からも①②③の点が確認できよう。

さらに表1を見ると、明治、大正にかけて、

- ④丁寧な言葉遣いでの終助詞「さ」の減少

⑤用言接続の終助詞「さ」の増加

⑥女性の終助詞「さ」の減少

という変化を観察することができる。『浮雲』では、終助詞「さ」は女性の用例の方が多いが、この終助詞「さ」のほとんどは、江戸語の名残のあるお政の用例である<sup>(4)</sup>。また、『道草』の女性の用例も、すべてが江戸生まれの謙三の姉の言葉遣いの中に見られるもので、明治以降の教育を受けた謙三の妻の言葉遣いには見られない。一方、用言接続の終助詞「さ」は増加が見られる。使用者は男性が多く、常体の会話の中で用いられている。

以上終助詞「さ」は、江戸から明治、大正にかけて使用場面、使用者、用法ともに変化し現代に至ったことが知られる。現代語の終助詞「さ」の用法に関しては、永野賢『現代語助詞・助動詞—用法と実例—』(1951)の中で、次のように述べられている。

- ①軽くあっさりと言いはなす。(形式的には断定の助動詞に代置される位置に用いられる。既定の事実であって、今さらどうにもならない、当然の事、自明のこととして言い表す。それについてとやかくいう事はできぬ、というような傍観的な、なげやりのニュアンスをもつ。男性語的なひびきがある。)

永野の定義した終助詞「さ」は、「ぞんざいな会話で使用される投げやりなニュアンスを持つ情意助詞」とまとめられる。しかし、この永野の定義は、現代語とはいえ昭和26年の記述であり、それからすでに50年以上の時が経過している。そこで、今回は、昭和初期から現在までの終助詞「さ」に関し新たに調査を行い、その変遷を観察する。

表1 男女別にみた終助詞「さ」の使用数

用例資料	終助詞「さ」	「さ」の使用総数 〔 〕は丁寧な会話での使用 〈 〉は用言接続	男性の使用 (会話総数)	女性の使用 (会話総数)
浮世風呂 (1808～13)		479 [135] < 2 >	141 (1335)	338 (1148)
春色梅児誉美 (1832～33)		51 [ 22] < 0 >	20 ( 444)	31 ( 574)
春色江戸紫 (1864)		58 [ 27] < 2 >	24 ( 335)	34 ( 399)
浮雲 (1887)		66 [ 36] < 6 >	23 ( 520)	43 ( 517)
道草 (1915)		52 [ 2] < 14 >	39 ( 731)	13 ( 423)

### 3. 昭和の資料に見る終助詞「さ」

#### 3-1 昭和初年から昭和20年までの口語資料に見る終助詞「さ」

昭和初年から20年までの口語資料としては、芥川龍之介『玄鶴山房』『蜃気楼』（昭和2年 1927）、久保田万太郎『春泥』（昭和3年 1928）、永井荷風『溷東綺譚』（昭和12年 1937）、長谷川時雨『時代の娘』（昭和16年 1941）所収の「伸びる草」「春の扉」、円地文子『南支の女』（昭和18年 1943）所収の「物慾」（脚本）を調査した。表2の中で、永井荷風の父は愛知県士族の出とあるが、荷風は小石川で生まれ育ったので、東京人の資料として扱った。

芥川の2つの作品は短編のため、助詞「さ」の用例は2例のみであった。

**01 お鳥** あれがお父さんの性分なのさ（お鳥→重吉）『玄鶴山房』

**02 O君** だからそれへこの札をつけてさ（O君→僕）『蜃気楼』

01のお鳥は主人公重吉の姑である。これは、婿の重吉に対し述べた言葉遣いの中に見られるもので、重吉が、義父の玄鶴が妾宅へ骨董品を持ち込むのを非難したのに対し、述べた言葉である。02の用例は、芥川の友人のO君（洋画家で芥川の親友小穴隆一と考えられる）が、芥川に、海岸で拾った木札を「水葬した死骸についていたんじゃないか」という推測に説明を加える場面である。これは、「話者の判断を意味する断定辞機能がある」という「てさ」形式（長崎（1999）では、終助詞「さ」が「動詞の連用形+て」に続く形を「てさ」形式と呼ぶ）と同様の用法と考えられる。

久保田万太郎の『春泥』は、下町を背景にした新派俳優の物語である。終助詞「さ」の用例は21例ある。すべて、新派の俳優同士の会話に見られる用例である。

**03 三浦** 千代三郎さ、あの（三浦→小倉）

**04 田代** 聞いたさ—あとですっかり聞いたから知っているさ（田代→三浦）

03の用例は、知り合いの役者仲間の女房とすれ違った三浦が、小倉に誰の女房か教えてい

表2

作家名（生没年）	作品発表時の年齢	出自等
芥川龍之介（1892～1927）	35	京橋→本所 新原家（牛乳業） 芥川家（数寄屋坊主）
久保田万太郎（1889～1963）	39	浅草 袋物製造
永井荷風（1879～1959）	58	小石川 愛知県士族
長谷川時雨（1879～1941）	62	日本橋 父は免許代言人
円地文子（1905～86）	38	浅草 父は国語学者

る場面である。「チビ三郎の内儀<sup>かみ</sup>さんじゃアねえか」といったので、誰かが分からなかった小倉に対し、「千代三郎」と言い直して説明している。また、04は、関東大震災の時亡くなった役者仲間の噂話をしている場面である。震災で亡くなった吾妻という役者が、向島へ引越してきたわけを話しており、三浦が「よく知ってるな？」と言ったのに田代が「聞いたさ」と答えたものである。「聞たのさ」「知っているのさ」という説明表現を用いてもいい場面である。

本作品では女性の用例がないが、これは女性の会話場面がほとんど見られないためである。役者仲間の中では、三浦の言葉が最もぞんざいであり、三浦の言葉遣いには断定「さ」よりむしろ断定「よ」の用例が多く見られる<sup>(5)</sup>。

・田代 あたりめえよ。—この寒空にこんなとこへ来るのはよツぼどすいきょうな奴かヒマな奴かだ。

『濃東綺譚』には、終助詞「さ」の用例は16例見られ、そのうち10例が女性の用例である。女性の用例には、江戸語の名残と思われる丁寧な言葉遣いとともに使用される「さ」の用例が見られる。

05 すみ子 向の突当りが明いているそうです。だけれど今夜は事務所のおばさんが居ないんですとさ (すみ子→種田)

06 お雪 兼ちゃん。ここだよ。何ボヤボヤしているのさ。氷白玉二つ……それから、ついでに蚊遣香を買ってきておくれ。いい児だ (お雪→氷売り)

07 種田 それなら、今時分うるついちア居られない。雨でも雷でも、かまわず帰るさ (種田→すみ子)

05の「すみ子」は、『濃東綺譚』の主人公の小説家大江が書いている「失踪」という小説に登場する女給である。以前下女奉公していた家の主人種田に話しかける場面で、丁寧な言葉遣いとともに「さ」が使用されている。この他、女性の使用する終助詞「さ」は、娼婦お雪の言葉遣いの中にも見られる。06は氷売りに話しかける場面で使用されたものであり、お雪の言葉の中には「買ってきておくれ」という江戸語の名残の言葉遣いがある。用言に続く「さ」は、07の大江の小説の主人公種田が使う用例が1例あるが、女性が使用する終助詞「さ」には、用言に続く形は見られない。

『時代の娘』の中では、「春の扉」に終助詞「さ」の用例が5例見られる。すべて、主人公千稲の叔母草子の用例である。

08 草子 お母さんと話してゐたのさ。兄さんの代りに千いちゃんが兵隊にゆけばよかつたつて (草子→千稲)

叔母の「さ」の用例の中には、「どうせわかつていまさあね」という「ますわね」の訛った

と考えられる形もある。用言に続く終助詞「さ」は見られない。

『南支の女』所収「物欲」(脚本)には、7例の終助詞「さ」の用例が見られる。2例が男性、5例が女性の用例である。女性の用例は富豪の未亡人甲斐子と雇い人の女性の言葉に見られる。

09 甲斐子 娘盛りの時分には、本當に先代が自慢にして連れて歩いたのも、むりぢやありませんのさ (甲斐子→野本)

10 克己 苦勞したにもよりけりさ、あ、石にひしがれた雑草みたいになつちまつちや、人間おしまいだぜ。(克己→瑛子)

09は、富豪の未亡人甲斐子が、嫁の瑛子の姉國子の後添えに、と考えている銀行員野本に話しかける場面である。「ませんのさ」と丁寧な言葉遣いに使用されているものであり、この他に、甲斐子の言葉遣いの中には「さうもゆきませんのさ」という用例が1例見られる。10は瑛子の夫克己が、野本に対する感想を述べている場面である。用言に続く終助詞「さ」は男女とも見られない。

以上戦前の終助詞「さ」の用例には、まだ女性の用例もかなり見られ、また丁寧な会話で使用される用例も残されている。但しこれらの終助詞「さ」の使い手を見ると、年配の女性や江戸語の名残のある人物に使用されるものであり、女性の終助詞「さ」の使用は偏っていることがわかる。

用言に続く終助詞「さ」の使用者は男性のみである。『春泥』の田代の用例は、現代語の終助詞「さ」の視点から見れば、「投げやりなニュアンス」の表現といえようが、文脈からは説明的な意味が窺われる。当時は用言接続の終助詞「さ」に、説明的な意味が含まれていたのではないだろうか。

### 3-2 昭和20年代～60年代の口語資料に見る終助詞「さ」

この時期の終助詞「さ」の用例は、堤千代『花うばら』(昭和28年 1953)より「花うばら」「きぬかつぎ」、三島由紀夫『永すぎた春』(昭和31年 1956)、安部公房『砂の女』(昭和37

表3

作家名(生没年)	作品発表時の年齢	出自等
堤千代(1917～55)	36	牛込
三島由紀夫(1925～70)	39	四谷 父は官僚
曾野綾子(1931～)	42	葛飾区 父は会社役員
青島幸男(1932～2006)	49	中央区 生家は弁当店

年 1962), 曾野綾子『太郎物語』(昭和 48 年 1973), 青島幸男『人間万事塞翁が丙午』(昭和 56 年 1981) から採取した。

『花うばら』では, 終助詞「さ」の用例は「花うばら」に男性の用例が 13 例, 女性の用例が 1 例見られる。この中で用言に続く「さ」は 5 例で, すべて男性の使用である。「きぬかつぎ」には, 女性の用例が 7 例見られる。女性には用言に続く「さ」の用例はない。

11 東一 知つてるさ。知らないわけがありやしない。(東一→くみ子)『花うばら』

12 女 大切な奥さまを, 座席に置いてきぼりにしてさ。(女→東一)『花うばら』

13 小母 おまえさんも悪い夢をみたのさ (小母→お兼)『きぬかつぎ』

「花うばら」の主人公くみ子は富裕な家庭の娘であり, その夫の東一も東大出身で, 銀行勤めをしているエリートである。11 は東一とくみ子の会話であり, 夜な夜な寝所を覗きにくる妹について, 話し合っている場面である。12 は新興日本舞踊の名取りの女性の言葉であり, 会話から東一と親密な間柄であることが窺われる。「花うばら」には, くみ子, くみ子の母, くみ子の妹などの女性が登場するが, 女性の終助詞「さ」の用例は名取りの女性の用例以外には見られない。

「きぬかつぎ」の 13 の用例は, カフェの女給お兼の小母が, 男性と別れたばかりのお兼を慰めている場面である。「きぬかつぎ」の用例は, すべてこの小母の言葉遣いの中にあり, その小母の言葉遣いには, 「おまえさん」「何かお食べかい」などの江戸語の名残のある言葉遣いが見られる。

『永すぎた春』では, 終助詞「さ」の用例は, 男性の用例が 17 例, 女性の用例が 1 例見られる。用言に続く用例はすべて男性のもので 6 例ある。

14 郁雄 あれは口実さ。夜の部がもう半分すんじゃってるよ。(郁雄→百子)

15 一哉 そうかい。そりゃあんなおやじにこき使われて, 若い身空で古本屋家業なんかやったら, 人間も変わるさ。(一哉→百子)

16 母 ピラフって何さ。(母→百子)

14 は婚約したばかりの大学生郁夫と古本屋の娘百子の会話に見られるもので, 「映画へ行くの」と尋ねる百子に答えた言葉である。15 は百子の従兄の一哉の言葉遣いに見られる。大学に行かせてもらえず, 古本屋のあとを継いだ一哉が不満を述べた場面である。16 の用例は百子が料理教室で舌平目のピラフを習ったと聞いたのに問い返す場面である。母の生家も古本屋である。百子に「およし, 女だてらに」という言葉遣いが見られるところから, やはり江戸語の流れをひく言葉を残している人物と考えられる。

『太郎物語』では, 終助詞「さ」の用例は 100 例以上見られる。いずれも男性の用例である。

用言に続くものは15例である。

17 太郎 一年上の茶道部なんかいたことのある人さ (太郎→父)

18 太郎 一本道だからな、この道より歩きようないさ (太郎→青山)

『太郎物語』では、友達や親子（特に男性同士）という身近な人物の間での会話が多い。17は太郎が父に五月さんという女性の話をしている場面である。18は太郎が友人と同居している青山と話している場面である。青山は社会人なので、太郎には青山に対し丁寧な言葉遣いも見られる。しかし、この場面は青山が太郎に失恋の痛手を話すところで、「太郎がわざと邪険に言っている」と描写されているように、青山を元気付けようとわざとぞんざいな言葉遣いをしていることがわかる。

『人間万事塞翁が丙午』では、終助詞「さ」の用例は12例で、男性の用例が5例、女性の用例が7例である。用言に続く用例は4例見られる。

19 清さん 見てのとおりでさあ、出陣する夫に操を立て、自慢の黒髪をバツサリ落して  
尼になっちまおうってわけで… (清さん→ハツ)

20 ハツ ねえさん、よく平気だね。どうしてあのタクシーと一緒に乗っていかなかったのさあ (ハツ→ハナ)

21 次郎 そりゃ世間には双子は多いさ、別に対してめづらしかねえけど (次郎→謙一)

22 こう それも仕方がねえさ、何しろ民主主義の世の中とかでみんな目覚めちまってる  
んだから (こう→ハナ)

『人間万事塞翁が丙午』では、この時期の他の作品に比べ、女性に終助詞「さ」の用例が多い。この作品は、青島幸男が母をモデルにしたもので、日本橋の弁当屋に嫁いだハナの戦中から戦後の生活が描かれた下町の物語である。登場人物の言葉遣いはいわゆる下町言葉であり、女性に終助詞「さ」が多いのは、下町言葉の使い手の会話が多いためと考えられる。19の清さんは弁当屋弁菊に昔から出入りする何でも屋である。この場面は、出征する夫次郎の腹巻をつくらうと、ハナが、腹巻の中に入れる髪の毛を清さんに切ってもらっている場面である。用例の「でさ」は「ですわ」の訛った形とも考えられる<sup>(6)</sup>。20はハナの妹ハツの用例で、出征していく夫の次郎を見送るハナに話しかける場面に見られる。21はハナあの夫次郎が、子供の謙一に双子が生まれたときに言った言葉である。22はハナの姑「こう」の言葉に見られる。ハナが、「ぼたん」という弁菊で働いていた女性が店をやめた理由を非難しているのに対し、述べた言葉に見られるもので、女性が用言に続く終助詞「さ」を使用している珍しい例である。この作品にはハナの言葉遣いにも「いいじゃないか、人生いろいろなことがあるさ」と用言に続く形が見られる。



以上、昭和 20 年からの終助詞「さ」を観察した。『花うばら』や『人間万事塞翁が丙午』の用例に見るように、女性の用例はやはり江戸語の名残のある人物に偏っていることがわかる。『太郎物語』は、他の作品に比べ終助詞「さ」の用例が多いが、この作品が友達や親子同士などの身近な人物との会話が多いためと考えられる。

この時期の終助詞「さ」の用例には、丁寧な言葉遣いとともに使用される用例は見られない（「でさ」、「まさ」の形を除く）。また、用言に続く用例が女性にも見られるが、下町言葉のやや乱暴な言葉遣いの中で使用されているものである。

### 3-3 平成年代の終助詞「さ」

平成以降の資料としては、ねじめ正一『高円寺純情商店街』（平成元年 1989）、篠田節子『女たちのジハード』（平成 9 年 1997）、石田衣良『池袋ウエストゲートパーク』（平成 10 年 1998）、金原ひとみ『蛇にピアス』（平成 15 年 2003）を使用した。

『高円寺純情商店街』は、昭和 37 年の高円寺の乾物屋を舞台としたねじめ正一の自伝的な物語である。終助詞「さ」の用例は 14 例見られ、男性の用例は 6 例、女性の用例は 8 例で、用言に続く用例は 3 例で男性の用例である。また、女性の用例は、すべて正一の祖母の言葉遣いに見られる。

23 祖母 植松の奥さんが一割引にしてくれておまけに白檀の香水をくれたのさ（正一の祖母→正一）

24 祖母 いえね、今じゃなくてもいいんだけど、やっぱり店を開ける前の方がいいんじゃないかと思ってさ（正一の祖母→正一の母）

25 盛義 本気さ。カズ江と結婚する。すぐする（盛義→正一）

26 正一の父 そりゃまずいさ（正一の父→正一）

23 は髪を染めて若返った祖母が、髪を染めるおまけに白檀の香水をもらったと正一に話している場面、24 は正一の母に卵の箱を運ぶのを頼んでいる場面である。祖母の言葉遣いには、

表 4

作家名（生没年）	作品発表時の年齢	出自等
ねじめ正一（1948～）	41	杉並区 乾物店
篠田節子（1955～）	41	八王子
石田衣良（1960～）	38	成蹊大卒
金原ひとみ（1983～）	20	板橋 父は翻訳家

「これを済ましてからにおしよ」「手伝っておくれでないかい」など江戸語の名残がある。男性の用例は、25の盛義、26の正一の父の他、正一も使用しており、幅広い年代の男性に使用があったことが知られる。

『女たちのジハード』では、終助詞「さ」の用例は12例で、いずれも男性の用例である。用言に続く用例は3例見られる

**27 松浦** 彼らが特別ってわけじゃないよ。人間関係の濃いところだからさ (松浦→康子)

**28 岡崎** 夫婦の間だから、手が出ることもあるさ (岡崎→康子)

27の用例は松浦が、地元の人間関係を説明している場面である。28の用例は、岡崎が自分の妻に暴力をふるったことに対し、弁明をしている場面であり、「仕方がない」というニュアンスがこめられている。

『池袋ウエストゲートパーク』では、終助詞「さ」の用例は7例、すべて男性の用例である。用言に続く用例は4例見られる。

**29 マサ** おまえの絵なんてこんなとき以外は役にたたないんだからさ (マサ→マコト, シュン)

**30 氷高** うちの組のほうでも必死になって探しているさ (氷高→マコト)

29の用例は、公園で、話しかけてきた少女たちを煙たがっているマコトとシュンに対し、仲間のマサが間に割って入った言葉である。30は、羽沢組の若頭氷高の言葉で、羽沢組の組長の娘を探してほしいとマコトに頼んでいる場面である。

『池袋ウエストゲートパーク』は、池袋の西口公園界隈の若者の間に起こる様々な事件を描いた作品である。登場人物は10代から20代の若者がほとんどであり、会話文は「えー、すごーい、チョウマ!!」「おまえら、うるせーよ」「いいじゃん」などのいわゆる若者言葉が使用されている。男性のぞんざいな会話が多いわりに終助詞「さ」の用例数は少ない。特に、体言・体言相当に続く形はほとんど見られない。

『蛇にピアス』では、終助詞「さ」の用例は6例見られる。但し、これは文末に使用されている形を数えたものであり、実際には、倒置表現として間投助詞的に使用されていると考えられる用例もある。

**31 ルイ** うん、ちょっとパンクな人と知り合ってさ (ルイ→マキ)

**32 シバ** 何となく結婚、してえと思ってさ (シバ→ルイ)

31は女性、32は男性の用例である。他の用例も「動詞連用形+て+さ」や「だってさ」の形式で使用されるものである。

以上平成の終助詞「さ」を観察した。ねじめ正一の作品では、女性の用例として、祖母の言

葉遣いに終助詞「さ」が見られる。これは先にも述べたが、時代が昭和30年代の設定であり、また下町の年配の女性という特殊性があるので、平成の使用とは言い難い。

『女たちのジハード』『池袋ウエストゲートパーク』は、ともに女性の用例は見られない。また、『蛇にピアス』では、女性の用例が2例あるが、この用例の「さ」は間投助詞的な用法である。平成では、男女含めて、終助詞「さ」の用例数は減少し、用例の内容も、間投助詞とも捉えることのできるものに偏ってきている。この傾向から終助詞として働く「さ」の使用は、若い世代では消えつつあることが推測される。

そこで、さらに若い世代の作家の作品について観察することとした。

#### 4. 若い作家に見る終助詞「さ」

資料として次の作家の作品を扱った。作家の中には東京出身者ではない人物もいる。表5に示した。生田沙代『オアシス』（平成15年 2003）、綿矢りさ『蹴りたい背中』（平成16年 2004）、三浦しをん『まほろ駅前多田便利軒』（平成18年 2006）、青山七恵『ひとり日和』（平成19年 2007）。

『オアシス』には、終助詞「さ」の用例は1例、『蹴りたい背中』では2例、『まほろ駅前多田便利軒』では6例、『ひとり日和』では、「さ」は間投助詞としての使用だけであった。

33 芽衣子 お母さん上で寝てる。夕飯いらないってさ（芽衣子→叔父さん）

『オアシス』

34 女性 グッズ売ってるんだってさ。どうする？（女性→友達の女性）

『蹴りたい背中』

35 行天 クリスマスまでに、いまつきあっている男とわかれたいんだってさ

（行天→多田）『まほろ駅前多田便利軒』

上記の終助詞「さ」の用例は、すべて「ってさ」という伝聞形式の「さ」の用例である。体

表5

作家名（生没年）	作品発表時の年齢	出自等
生田紗代（1981～）	22	群馬県 明治学院大学
綿矢りさ（1984～）	19	京都府 早稲田大学
三浦しをん（1976～）	30	東京都 早稲田大学
青山七恵（1983～）	24	埼玉県 図書館情報大学

言や用言に続く終助詞「さ」の用例は見られない。これらの用例以外にも、「さ」の用例は、「会ってなくてさ」「勝手に想像してくれるのにさ」「人に頼めばいいんだしさ」など、文末に位置しているもの間投助詞的に使用されているものばかりである。断定辞としての機能やなげやりな情意を与える意味を持つ用例はなく、語調を整えるような形式的な用例に偏っていることが、若い世代の特徴と考えられる。

## 5. 終助詞「さ」の衰退理由

以上、昭和初期から平成までの終助詞「さ」の用例を追った。昭和初期には、江戸語に見られた丁寧な会話にも使用される用例があり、江戸語の名残の言葉を残す女性に終助詞「さ」の用例が見られた。戦後は主に男性が使用する終助詞として定着するが、平成に入ると「さ」の終助詞としての使用は減少する。特に若い世代では「さ」は、語調を整える間投助詞としての使用が目立ち、先にあげた永野（1951）でいう「傍観的でなげやりなニュアンスをもつ」終助詞としてはほとんど機能していないというのが現状である。

終助詞「さ」の使用が減少した理由には、次のような点があると考えられる。

### ①男女の言葉遣いの接近

現代の若者は、男女の言葉遣いに、性差があまりなくなっているようである。高橋（2002）や小林（2007）などで述べられているように<sup>(7)</sup>、現代では若い女性の言葉の男性語化が目立つ。その一つの例として、尾崎（2004）の中で報告された、国語研究所の1997年の日本語における言葉の男女差の調査結果をあげる。

国語研究所の調査は、日本語における言葉の男女差を終助詞などの文末形式から分類し、現代の使用に関して東京在住の20代～60代の男女を対象に調査を行ったものである。「あしたは雨だ」という内容を伝える場合、「雨よ」「雨ね」「降るわよ」「雨だわよ」「雨だよ」「雨だね」「降るよ」「雨だぞ」「雨だぜ」の表現を使うか否かという質問である。この結果、全体としては「雨よ」「雨ね」「降るわよ」に関しては女性の使用の割合が多く、反対に「雨だぞ」「雨だぜ」に関しては男性の使用の割合が多いという結果であった。

しかし、年齢別に見ると、若年層の女性ほど、女性専用の文末形式の使用の低下が見られ、「雨だよ」、「雨だね」、「降るよ」の形の方が一般的となっている。また男性も若い世代では、「ぞ」や「ぜ」といった男性専用の終助詞を用いた表現より、「雨だよ」「雨だね」などの中間的な表現の方が多く使用されるという結果が表れている。

このような流れを見ると、若い世代に、終助詞「さ」が使用されなくなっているのは、「さ」

が「男性語的な響きがある」(永野 1951) 終助詞だからであり、中間的な言葉遣いを好むようになった若い世代には、受け入れられなくなったと推測できる。

## ②コミュニケーション形態の変化

終助詞「さ」が使用されなくなった理由として次に考えられるのが、現代の若者の「コミュニケーション形態」である。若者の言葉遣いの特徴とされる句末、文末の尻上がり形態は、相手に同意を求める意識の表われとされる。若い世代では、自らの判断として物事を述べるのではなく、相手に確認を取りながら話す傾向が見られる。これに対し終助詞「さ」は、相手に説明的に述べる場合に用いられる語である。陳 (1987) では、

**「さ」は話し手が確認、確信していることを聞き手に対する説明としてのべる文につける終助詞である。**

と述べている。つまり終助詞「さ」を使う場合、相手を説得させるような話し手の強い意志を持つことになる。このような訴えかける形態が、若い世代のコミュニケーション手段に合わないことが、終助詞「さ」が使用されなくなっている原因と考えられる。

## 6. おわりに

終助詞は情意を受け持つ部分であるため、他の助詞に比べ時代による変化が著しい。現代では「もの」や「こと」あるいは準体助詞「の」なども終助詞的な用法を持つようになった。しかしその一方で、時代により使われなくなった終助詞も見られる。現代では男女の言葉が接近し、男性専用、女性専用とされる終助詞が、実際にはあまり使用されなくなっているようである。また、コミュニケーションの方法が変わることにより、相手への話の持ちかけ方に関わる終助詞の使用は変化する。今回は小説を主とした文字資料から調査を行ったが、今後は、各時代の言語生活と終助詞の関係について、自然会話を中心とした音声言語からの考察を試みたいと考えている。

## 注

- (1) 終助詞「さ」に関しては、長崎 (1998) の他、長崎 (1999, 2001, 2004a, 2004b) などでも、調査を進めている。
- (2) (長崎 2006) 参照。
- (3) 表1は2001年に日本女子大学に提出した博士論文『標準語形成過程の研究』をもとに作成している。尚、表の( )内は、資料の男女別の言語量の目安として、会話総数を提示している。

- (4) 『浮雲』の中で、女性が使用する終助詞「さ」の用例は43例、そのうちお政の用例は36例、お政の娘お勢の用例は7例である。
- (5) 長崎(2004a, 2004b)では、体言・体言相当に接続する終助詞「さ」、終助詞「よ」を断定「さ」、断定「よ」と呼んでいる。
- (6) 「でさ」に関しては、終助詞「わ」が助動詞「です」「ます」などと融合して「ア段の長音」となる場合がある。この作品では他に堀留の船頭の言葉の中に「今度から端の下へ入る時は傘をさしまさあ」という例が見られる。
- (7) 高橋(2002)には、女子学生同士の自由会話の場面が載っているが、「～だよね」という男女の言葉遣いの中間的な文末表現、「すげー」「うるせー」などの乱暴な言葉遣いが見られる。また、小林(2007)では「十五年ほど前より女子学生において、「あら、雨だわ」ではなく「あっ、雨だ」が聞かれ、「おなか、へったわ」ではなく、「はらへった」が聞かれるようになった。」とある。

### 参考文献

- 尾崎喜光, 2004, 「日本語の男女差の現状と評価意識」, 『日本語学』, pp.23-6
- 尾崎喜光, 2005, 「ケース1 女のことば・男のことば」, 『ケーススタディ 日本語のバラエティ』, おうふう
- 小林千草, 2007, 『女ことばはどこへ消えたか?』, 光文社
- 高橋 巖, 2002, 『日本語の女ことば』, 高文堂出版社
- 陳 常好, 1987, 「終助詞一話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞一」, 『日本語学』, pp.6-10
- 永野 賢, 1951, 『現代語助詞・助動詞一用法と実例一』
- 長崎靖子, 1998, 「終助詞「さ」の機能に関する一考察」, 『国語学』, 192集
- 長崎靖子, 1999, 「江戸語の「動詞連用形+て+さ」表現形式に関する一試論一西部待遇表現「動詞連用形+て+指定辞」との関係から一」, 『国文目白』, 第38号
- 長崎靖子, 2001, 『標準語形成過程の研究一断定表現文末形式の歴史的変化を通して一』, (2001年9月提出 博士論文)
- 長崎靖子, 2004a, 「『浮世風呂』『浮世床』に見る断定辞としての終助詞「よ」の位相一断定辞としての終助詞「さ」との比較から一」, 『会誌』, 第23号
- 長崎靖子, 2004b, 「江戸語から東京語に至る断定辞としての終助詞「よ」の変遷一断定辞としての終助詞「さ」との比較から一」, 『近代語研究』, 第12集
- 長崎靖子, 2006, 「江戸語における「でございます」」, 『会誌』, 第25号